武生ルネサンス通信

2016.6.7

264 号

6 月例会のお知らせ

日　時　　：　6 月 19 日（日）18:00～
場　所　　：　横田弄庵（越前市氷坂 33-18）
内　容　　：　皐月　月見の宴

年初めにお知らせいたしました予定では、６月の例会は、弄庵でザリガニ釣りをして、試食をすることになっていました。ところが最近どういう加減か、弄庵の池とその横にある貯水槽の水がどんどん減り、干上がりつつあり、とてもザリガニ釣りができる状況ではありません。
従って行事内容を変えさせていただきました。

＊申し込みは 16 日までに三木まで（09062705547）お願いします。

■新暦の６月 19 日は旧暦五月の十五日でちょうど十五夜です。夕方から見え始める月を愛でながら宴会を催したいと思います。ザリガニを「鬼殻焼き」にして食べるつもりが、当てが外れましたので、この日おいでになる方それぞれが「焼くもの」を何か持参してください。闇鍋ならず、闇焼きです。勿論お持ちいただく量は少しずつでいいです。いい炭火を起こし、おいしいお酒を用意して、お待ちしております。また、５年ほど前に町屋倶楽部へ来もらい、越前の伝統的祝い唄を伝授してくださった林幸子さんと、尺八の上西弘さんに、この月見の宵に賑わいを添えていただくことになりました。林さんはその後、加賀山流民謡の大師範になられ、今は加賀山昭佳さんとして、民謡の指導をしておられます。私達が小さい頃の越前の宴会では、誰ともなく必ず、「菜種の花」とか、「越前音頭」「粟田部音頭」などの祝い唄が出てきたものです。結婚式では、「高砂」や、「四海波」などの謡曲で始まり、そのあとすぐに三味線の伴奏で「菜種の花」が唄われ、「ヨーホイ、ヨーホイ、ヨーイヤナ、アレワイセ、コレワイセ、サーサーナンデモセ」と、皆が唱和して一気に座が崩れるのが一般的だったように思います。「男子たるもの謡曲の一曲や二曲は唄えないことには」と、それなりの年齢になると謡曲を習うという風習もありました。「謡曲が唄えんもんは、菜種の花でも唄え」といも言われたものです。今年は東海北陸地方の梅雨入りは 6 月９日頃で、梅雨明けは７月 17 日～24 日とのことですし、「雨月」は旧暦五月の異称にもなっていますので、この日の空の具合は些か心配ですが、家の中でもなんとかなります。雨天決行です。

■旧暦五月十五日の月と言いますと、『平家物語』第四巻信連（のぶつら）の段の冒頭が思い出されます。「宮はさ月十五夜の雲間の月をながめさせ給ひ、なんのゆくゑもおぼしめしよらざりけるに、（これからどんなことが起こるか考えてもおられなかったところに）源三位入道の使者とて、文もていそがしげでいできたり」熊野別当湛増から以仁王（宮）謀反の報告を受けた清盛は、後白河天皇の第三皇子以仁王（もちひとおう）の元に捕縛の使いを送る。それを察知した長谷部信連が以仁王を女装させて逃がすという段です。

■今はサツキが満開ですが、これから紫陽花が見ごろになります。紫陽花に蝸牛は定番の図柄でしたが、最近蝸牛をとんと見かけなくなりました。畑にナメクジを除去する薬を散布するのが原因と聞きましたが。